

風化防止に向けた取り組み ～福祉・心理学生を対象として～

田中千枝子（日本福祉大学福祉社会開発研究所）

鈴木由美子（長野大学社会福祉学部）

二本柳 覚（京都文教大学臨床心理学部）

研究要旨

地域の多職種連携に向けて、次世代を担う大学生へのスモン教育の一環として、2大学の心理・福祉学生へ向けてスモン患者当事者をゲストスピーカーに招き、「当事者の声を聴く」1時間半の授業を実施した。その学生の授業評価をもとに、プログラムの再検討を実施し、次年度の準備を行うことにした。またゲストスピーカーから、薬学部や看護学部での学生の反応との差異等の意見もあり、介護・福祉学生に向けた授業を、当事者とともにつけていく必要性が浮き彫りになった。

A. 研究目的

スモンは薬害を考える上で原点ともいえる疾患であるが、患者人数は1,000名を切り、平均年齢は82歳を超え、風化が危惧される現状であることが指摘されている。今回、福祉・心理を学ぶ学生を対象に、スモンと薬害の知識や風化防止の啓発活動を目的に、スモン患者当事者による講演会を実施した。

B. 研究方法

大学生76名に対して講演会を行い、講演会の前後にアンケートを実施した。講演会前の質問項目は、Q1) 聞いたことがある薬害 Q2) 内容を知っている薬害 Q3) 薬害のイメージ Q4) 聞いたことがある難病 Q5) 内容を知っている難病 Q6) 難病のイメージである。講演会後の質問項目は、Q1) スモンとスモンに対する取り組みについて感じたこと Q2) 今後スモン患者、難病患者に対してどのようなことに取り組みたいか Q3) 感想、講師へのコメントとした。

C. 研究結果

大学生76名のうち、取得希望の資格（複数回答）

は、精神保健福祉士26名（37.1%）、公認心理師22名（31.4%）、臨床心理士21名（30%）、社会福祉士14名（20%）、資格取得予定なし8名（11.4%）であった（図1）。

講演会前に聞いたことがある薬害は、複数回答でスモン36名（51.4%）、エイズ18名（25.7%）、ヤコブ病15名（21.4%）であり、なしと回答した者が19名（27.1%）であった（図2）。具体的な薬害の内容については、知らないが40名（57.1%）で最多であった

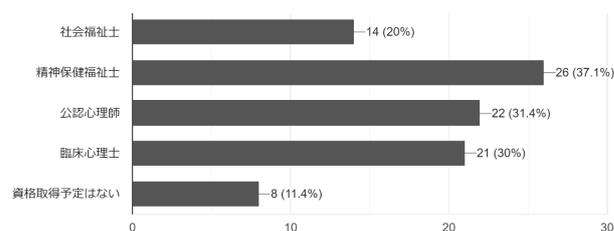


図1 取得希望の資格（複数回答）

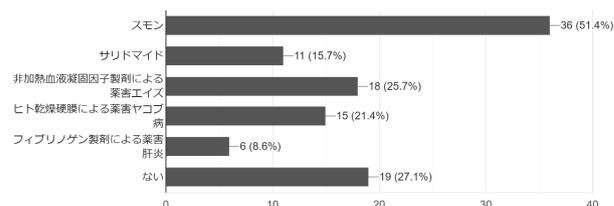


図2 【聴講前】聞いたことがある薬害

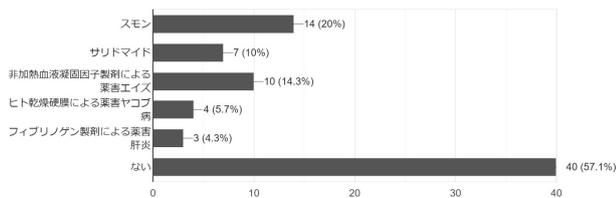


図3 【聴講前】薬害の具体的な内容を知っていますか

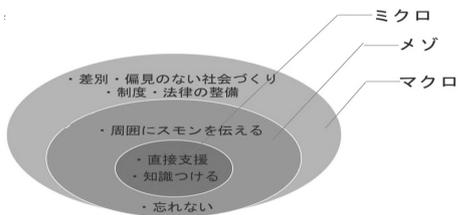


図4 学生が設定した課題

(図3)。薬害のイメージは、「薬の副作用による健康被害」「治らない」「人為的なもの」と回答がみられた。

講演会聴講後に、スモンとスモンに対する取り組みについて感じたことを記述してもらったところ、「風化させてはいけない」「制度が役に立っていない。正しい支援が必要」「誠意ある態度が必要」「社会の理解が足りない」「薬害は恐ろしい」「スモンを知ることの大切さ」「薬害は人の人生を変えてしまう恐ろしさ」「偏見や差別がある」「医療福祉関係者の適切な対応が必要」「他人事ではない」と回答があった。

学生自身がスモン患者、難病患者に対してどのようなことに取り組みたいかについては、「積極的に支援したい」「サポートや手助けの方法を考えていきたい」「忘れないこと」「差別や偏見のない社会にしたい。優しい社会にしたい」「スモンを広めていきたい」「対等な関係を築いていきたい」「もっと知識をつけたい。理解を深めたい」と回答があった(図4)。

D. 考察

薬害被害者の講演会を初めて聴講した福祉・心理を学ぶ学生たちは、薬害としてのスモンに対する認知度の低さや制度・支援の不足に対する指摘、薬の副作用の怖さや悲惨さ、風化させない体制の必要性、他人事ではないこと、知ることの大切さ、伝えていく取り組みの重要性について多くの感想を持った。そして、学生自ら取り組みたいこととして、理解を深めるために知識をつけること、スモンを周囲に広めること、日常

的な手助けや支援、偏見や差別のない優しい環境づくり、社会制度や法律の整備、忘れず風化させないことなど、マイクロからメゾ、マクロレベルにおける課題が寄せられた(図4)。また幼少期から専門職養成教育に至るまで、薬害を学ぶ機会がないことが改めて示された。

E. 結論

スモン当事者の協力を得て、福祉・心理を学ぶ76名の大学生に対して講演会を実施した。今回聴講した大学生は、薬害スモンを「聞いたことがある」程度で詳細を知る者はひとりもいなかった。また全員が薬害被害者の体験談を初めて聞いた学生たちであった。スモンを知り、患者さんへの直接支援、自分が拠点となって周囲に広げていきたいという感想、偏見や差別のない社会づくり、制度や法律の整備など、マイクロからメゾ、マクロレベルにわたる課題が寄せられた。

また、福祉・心理の専門職を志す大学生たちの養成カリキュラムに、薬害を学ぶ機会がないことも明確になった。社会福祉士養成において難病のひとつとしてスモンが記載されている程度であり、今回のような講演会は若い世代に対する啓発活動としても有効であることが示された。

さらに講義の当事者から、薬学部と看護学部でも授業経験があるが、手ごたえが違ったと伝える内容や反応についてコメントがあった。そうした意見も検討し、薬害スモンの支援者に必要な視点や知識・技術等について、さらに課題が深まった。

G. 研究発表

なし